



ドイツの管弦楽史におけるホルン

佐伯茂樹

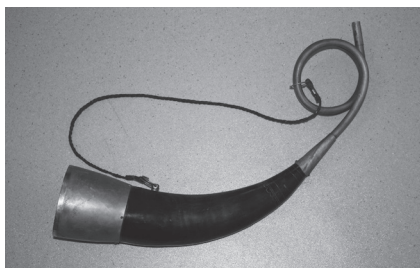
「ドイツの深い森にこだまするようなホルンの響き」。この深く壮大な響きは、ワーグナー、ブルックナー、リヒャルト・シュトラウスなど、19世紀ロマン派のドイツ・オーストリアの管弦楽曲には欠かすことができない重要な存在です。ところが、バロック・古典派の音楽には、このような概念はほとんど見られません。テレマンやJ.S.バッハの音楽でも、ホルンは、高音域でトランペットのような信号を吹き鳴らしていることが多く、ドイツの深い森を連想させるようなイメージとはかなり違います。イギリスに帰化したドイツ人作曲家ヘンデルの管弦楽曲〈水上の音楽〉や〈王宮の花火の音楽〉でも、やはり、ホルンは、トランペットと対峙する形で勇ましいパッセージを吹いているだけで、深い森のイメージはありません。

そこで、ここでは、ホルンという楽

器の歴史を辿りながら、「ドイツの森を象徴する楽器」として広く認知されるまでの過程を探っていくことにしましょう。

フランスで発達した 狩猟ホルン

ヨーロッパには、大昔から、狩猟の際に動物の角で作った角笛を吹き鳴らして合図をする習慣がありました。まさにそれが「Horn (角)」の語源になるわけです。やがて、角笛を金属で作るようになり、この楽器はビューグル(軍



角笛 (写真提供：筆者)



上：ビューグル (写真提供：浜松市楽器博物館)

下：狩猟ホルン (写真提供：浜松市楽器博物館)

隊ラッパ)へと発展していきました。

一方、真鍮の精製と加工の方法が東洋から伝わってくると、金属の管を丸く巻いた狩猟ホルンが登場します。丸く巻くことで、馬上で肩にかけることができるようになり、管を長くすることで、より多くの自然倍音を出すことが可能になりました。

この狩猟ホルンを本格的な狩猟に採り入れたのが、ルイ王朝のフランスの王侯貴族でした。彼らは、狩猟の際の合図として吹き鳴らすだけでなく、大勢で曲を合奏するようになり、オペラでも使われるようになりました。フランスの狩猟ホルンは、現在でもフランス各地のイベントでその響きを聴くことができますが、ワーグナーやブルックナーの深いイメージの音とは異なり、本当にけたたましい耳障りな音であることに驚かされます。

ボヘミア人による改良と ドイツへの伝播

このフランスのローカルな楽器をヨーロッパに広めるきっかけをつくったのはボヘミア人でした。1681年にヴェルサイユ宮殿を訪れたボヘミアの貴族フランツ・アントン・フォン・シュポルック伯爵がフランスの狩猟ホルンに注目し、二人の使者にこの楽器の演奏法と製作法をヴェルサイユで学ばせたのです。彼らはボヘミアに楽器を持ち帰り、独自の改良を加えた楽器を発表しました。この楽器はドイツにも伝わり、真鍮加工の秘伝を持っていたニュルンベルクで作られるようになりますが、当時のドイツには、このタイプの楽器は存在しなかったので、トランペットの一種として認識されてしまったのです。テレマンやバッハのホルン用法がトランペット的なのはそのためなのでしょう。

当のボヘミア人はと言うと、ベルを太くしたり巻をコンパクトにするなどの改良を加え、オーケストラの中で他の管楽器と演奏しても違和感のない音色がするようにしていきました。ウィーンでは、様々な調性に対応できるように「ボーゲン」と呼ばれる替え管が開発されたことで、ホルンはオーケストラのレギュラーメンバーの座を獲得することができるようになったのです。



ナチュラルホルンのボーゲン（福川伸陽氏所有）©下野剛

ボヘミア人たちの改良の手は止まりません。1750年頃には、ボヘミア人でドレスデンの宮廷オーケストラのメンバーだったアントン・ヨーゼフ・ハンベルが、右手をベル（朝顔）に差し入れて音程を調節する「ハンドストップ奏法」を開発したのです。これによって、無理に高音域を吹かなくても、まろやかな中音域でメロディを自由に演奏できるようになりました。それだけではなく、いつも右手をベルに差し入れていることで、深く柔らかい響きになるという副産物もあったのです。

「ドイツの森」というイメージを作ったウェーバー

「ハンドストップ奏法」の登場によって、ホルンは、交響曲や管弦楽曲に欠かすことのできない存在になりましたが、19世紀になると、その後のホルンのイメージを決定づける名曲が登場します。それは、ドイツのウェーバーが作曲した歌劇〈魔弾の射手〉（1821年初演）。このオペラは、ドイツの民

話を題材にしたもので、ドイツの森が舞台になっています。ドイツ人のためにドイツ語で歌われる初の本格的なオペラとして、ドイツ人の聴衆に熱狂的に歓迎されたのですが、それと同時に、このオペラで大活躍する4本のホルンの響きが、ドイツの深い森を象徴する存在だというイメージが広く浸透しました（モーツァルトも、ホルンのことを「Waldhorn（森のホルン）」と呼んでいるので、古典派時代からそうした概念があったのかもしれませんが）。〈魔弾の射手〉の設定は1650年ごろのボヘミアの森なので、まだボヘミアやドイツには狩猟ホルンが流入していないはずなのですが、ウェーバーのこの作品によってホルンはドイツやドイツ精神を象徴する存在になったのです。とりわけ、序曲の冒頭に出てくるホルン四重奏は、どこかノスタルジーを感じさせるこの楽器の新しい側面を開拓したと言っていいでしょう。

ドイツの伝説のシンボルにしたワーグナー

ウェーバーのホルン用法の影響を強く受けたのがワーグナーでした。彼は、ドイツ語によるオペラを数多く作曲しましたが、そこでは、「ホルン＝ドイツの森」というウェーバーが確立した概念が引き継がれました。中世ド

イツの叙事詩を題材にした楽劇〈ニーベルングの指環〉では、舞台上の演出として実際の角笛（シュティアーホルン）も登場しますが、〈ジークフリート〉のホルンコールのように、ホルンがそのシンボルとして用いられています。ワーグナーは、自然倍音による信号的なパッセージを多用する一方で、ヴァルヴホルンならではの自由な使い方も積極的に採用していて、ホルンという楽器がもつ「いにしえ」の側面と「機能的な楽器」としての可能性の両面をバランスよく引き出した功績は高く評価しなければいけないでしょう。もうこの時点では、「ホルン＝ドイツ人の心の源にある響き」というイメージもしっかりと定着しました。

機能を最大限引き出したリヒャルト・シュトラウス

「ホルンはオーケストラの魂」と語ったシューマンや、ウィーン・ヴァルトホルン協会の創設メンバーだったブラームスなども、ホルンを特別な楽器として扱っていますが、オーケストラにおけるホルンの機能的な使用法を飛躍的に向上させた作曲家としては、リヒャルト・シュトラウスの名を挙げないわけにはいきません。シュトラウスは、父親であるフランツ・シュトラウスがホルン奏者だったこともあって、

オペラや交響詩でホルンを大活躍させました。シュトラウスは「ホルン＝ドイツの森」という概念を受け継ぎ、〈アルプス交響曲〉では、ホルンが森の角笛を象徴するようなパッセージを奏で、遠くから聴こえてくる信号を表現するために、舞台裏で12本ものホルンが吹き鳴らされます。

また、自らの半生を描いたと言われる交響詩〈英雄の生涯〉の冒頭の主題や、交響詩〈ティル・オイレンシュペーゲルの愉快ないたずら〉のソロでは、3オクターヴ近い音域を駆け巡るパッセージを要求しており、オーケストラのホルンの可能性を極限まで極めたと言っても過言ではないかもしれません。

以上のような経緯があって、現在では、ホルンはオーケストラに欠かすことのできない重要な存在になりました。楽器の機能が発達しても、右手をベルに差し入れる習慣は大事に守られており、結果として、木管楽器ともなじむ温かい音色が得られます。もちろん、森の合図という概念も失われておらず、強奏時には狩猟の場面を連想させる野性的な力強い響きを出すことも可能です。フランスで生まれ、ボヘミアで発展し、ドイツでその座を確立したホルンの歴史を思い浮かべながら名曲を鑑賞してみてください。

（さえき しげき・音楽評論／古楽器奏者）

亀山郁夫 ——④〈最終回〉

Ikuo Kameyama

過酷な運命と死者への思い

ショスタコーヴィチ：交響曲 第8番



ドミトリー・ショスタコーヴィチ (1906～75) の音楽に対して、私は長い間、偏見を抱いていました。

1975年8月、大学院生だった私は、旅行会社のツアーのアルバイト添乗員としてモスクワに滞在中、現地のニュースでショスタコーヴィチの死を知りました。でも、当時は「芸術家としての良心を捨てて、ソ連の体制に迎合する作品を書いた政府の御用作曲家」と思っていたので、何の感慨も湧かなかった。

その時にお土産に買って帰ったのが、ショスタコーヴィチ最後の交響曲、第15番のレコードでした。指揮は作曲家の息子マクシム・ショスタコーヴィチだったと思いますが、その演奏はよく覚えていません。作曲家の真実が、録音では伝わってこなかったのです。

月日は流れて94年6月、私はショスタコーヴィチの故郷であるサンクトペテルブルクにいました。前年から始まった「白夜の星」音楽祭を聴くため、

長期滞在していたモスクワから出かけたのです。その中の一夜、フィルハーモニーホールで開かれたコンサートで、私は衝撃的な体験をしました。

前半、ショスタコーヴィチの弦楽四重奏曲の演奏中に、私のすぐ前列に座っていた客が「イデオティスム (バカバカしい)！」と吐き捨てるように声を上げたのです。作曲家の音楽が「荒唐無稽」と新聞紙上で批判されたのは1936年のこと。作曲家に対する偏見がいまだにあるのかと驚きました。御用作曲家とばかり思っていたショスタコーヴィチのイメージがその時、少し揺らいだ気がしました。

そして後半。あのマクシムが指揮するサンクトペテルブルク響による交響曲第8番が始まり、第1楽章の後半まで進んだ時、突然、何かが変わったのです。沈痛で静かな音楽が急激に荒々しい本性を表し、ドラムの長いロールに続いて序奏主題が猛然と炸裂する。そ

の瞬間、「いったいこれは何なんだ!」と。まったく予想外の、論理を超越した、あらゆる感情が一気に押し寄せてきて、私は打ちのめされてしまいました。

第8番は当初、第2次世界大戦中の激戦地の都市にちなんで「スターリングラード交響曲」と名付けられる予定でした。ソ連軍とドイツ軍が死闘を繰り返

げ、^{はいきよ}廃墟と化した街。作曲家は戦いで命を落としたすべての人のためにこの曲を捧げたのですが、私はそのような経緯をまったく知らずに音楽を聴き、こんな風に感じたのです。続く第2楽章は道化じみた不吉な雰囲気、第3楽章は祝祭的な「死の舞踏」、第4楽章は悲痛な鎮魂の祈り、そして終楽章は絶望の果てに訪れた、ある種の静かな^{あん}安堵。ここに勝利の喜びはありません。

マクシムの指揮は全曲を通してテンポが一定せず、何だか酔っ払いの千鳥足みたいな演奏でした。でも、あのよろめくような足取りは、死に神の巨大な鎌で情け容赦なく刈り取られ、打ち倒された人々の深い悲しみから生まれたのかもしれない。第8番にはロシア人が直面した過酷な運命が刻印されています。それが何かの啓示のように、直観的に私の中に入ってきた。

作曲家に対する見方は、あの日を境に180度変わりました。ショスタコー



晩年のショスタコーヴィチ

ヴィチ作品に繰り返し現れる^{ちんうつ}沈鬱な楽章は、一種のレクイエムです。作曲家が繰り返し死者に思いを馳せたのは、生き残った者が持つ一種の後ろめたさではないか。国を代表する芸術家として特権を享受していても、時の権力者からたびたび批判された彼は、ソ連という国に希望を持っていなかった。そこから生じる自己欺瞞^{きまん}と罪の意識に引き裂かれた精神こそ、ショスタコーヴィチの創作の原動力だったのでしょうか。

22年前の一夜の出来事が、その後の私のソ連時代の文化・芸術研究の出発点になりました。作曲家ショスタコーヴィチとその息子マクシムには、今でも感謝しています。(聞き手・事務局)

◆次号からは篠田節子さんです。

profile かめやま・いくお

1949年栃木県生まれ。名古屋外国語大学長。音楽、美術を含むロシア文化・文学研究の第一人者。翻訳したドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』はベストセラーに。2013年『謎解き「悪霊」』で読売文学賞受賞。著書・訳書多数。

◎首席ホルン奏者

松坂 隼

Shun Matsuzaka

プレッシャーはありますが
覚悟はできています

「8月のプログラムは、23日の〈家庭交響曲〉などリヒャルト・シュトラウス特集でホルンが大活躍しますね」

「〈家庭交響曲〉ははじめ全部好きな曲ですが、まさかまとめて1回で演奏するとは！ これは死ぬ〜（笑）と思うとともに、楽しみでもあります。」

R.シュトラウスの父親は、伝説的なホルン奏者でした。その関係で幼い頃からシュトラウスの周りには名演奏家や指揮者がいて、おつきあひも他の作曲家より多かったのでしょう。それで彼の作品は、様々な楽器に難しい技術が要求されるのだらうと思います。〈家庭交響曲〉で、ホルンには一般的に演奏される曲の中で最も高い音が出きます。十分準備しないと吹けない。シュトラウスは、ホルン以外の様々な楽器もその特徴を実によくとらえ、性能を発揮できるような音を並べています。各セクションが、部品というより、それぞれ成り立つ音楽でできている。それがシュトラウスだと感じます。

「8月にはこのほか、ウェーバーの〈魔弾の射手〉序曲やブラームスの交響曲第1番にも出演します」

「〈魔弾の射手〉は小学生の頃、吹いたことのある思い出の曲ですし、ブラームスの第1番はもう何回演奏したことか。いずれもホルン演奏の醍醐味です。8月の指揮者は、いずれもベルリン国立歌劇場管弦楽団の元ホルン奏者、S.ヴァイグレさん。彼を知る人が言うには、天才という言葉はこの人のためにあるというほどのホルン奏者なので、その点も楽しみです。」

「松坂さんは福島出身。小学校の部活動でホルンを始め、地元のジュニア・オーケストラで活躍、東京芸大附属高へ。ドイツ・ミュンヘンでの2年の留学を経て芸大に入学、3年生の時に読響のオーディションに合格、入団した」

ドイツでは、すごい演奏家たちと接する機会が多く、いい演奏を一杯聴きました。日本語とドイツ語とでは発音が違うし、息の出し方も違う。そこが彼らと日本人演奏家の違いだと肌身に感じました。

読響に入団した頃、常任指揮者（当時）のスコロヴァチェフスキさんには、「ホルンがやかましい」「ピアノッシ



モ！」とさんざん注意されました。彼の音楽の特徴が分かってくると、このままではダメだと先回りして、もっと掘り下げた吹き方をしようと練習の仕方を工夫するようになった。先回りするつもりで吹いても怒られていましたが（笑）。彼の厳しいリハーサルで鍛えられなければ、僕はいろんな「引き出し」を作れなかった。今は、すごく感謝し、恩義を感じています。〈再びオーディションを受けて、2016年1月には首席奏者に昇格。読響での演奏活動はちょうど10年になる〉

スコロヴァさん以外にも素晴らしい指揮者と出会いました。たとえばテミルカーノフさん。チャイコフスキーの

交響曲第5番の第2楽章に有名なホルンのソロがありますが、何度も吹いていながら、イメージが固まらなかった。指揮台に立ったテミルカーノフさんに「とりあえず好きに吹いて」と言われ、いつものように吹いた。そしたら、「素晴らしい、有難う。じゃあ、今度は私の手の通りに吹いてくれ」と。彼の手を見て吹いたら全部ストンと落ちた、腑に落ちた。手の動きだけで。こんな風に音楽を作るのか、これ以外にないと全て納得できたから、感動して涙が出た。ああ凄いと。

「最後にホルンを演奏する楽しみ、魅力について」

多くの曲で、最も目立つところにホルンのソロが出てきます。その1回でコンサートが大成功か大失敗か決まってしまうようなね。プレッシャーはあるし、決して慣れません（笑）。でも、覚悟はできています。

時代とともに、ホルンの楽器としての性能は上がってきました。プレイヤーのレベルも向上しているはず。ホルンは音色さえ良ければいいと言われていた頃もありましたが、今はフレージングやハーモニーなど深く掘り下げることが求められます。音だけでなく、音楽としてオーケストラにかかわれる楽器なんだということも、お客様に感じてもらえたらと思います。

二人の巨匠が魅せる《極上のスペイン音楽》

9/16 (金) 19:00 第596回 名曲シリーズ
サントリーホール

シャブリエ：狂詩曲〈スペイン〉
ファリャ：交響的印象〈スペインの庭の夜〉
アルベニス：〈イベリア〉から
トゥリーナ：交響詩〈幻想舞曲集〉

指揮：ヘスス・ロペス＝コボス ピアノ：ホアキン・アチュカロ



ヘスス・
ロペス＝コボス

コンサートマスター長原幸太らが繰り広げる白熱の室内楽

9/20 (火) 19:30 第11回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール ※19:00開演 **完売**

《長原幸太ら読響メンバーの室内楽》
モーツァルト：ディヴェルティメント 変ホ長調 K.563
ベートーヴェン：交響曲 第7番 (弦楽五重奏版)
ヴァイオリン：長原幸太 (コンサートマスター)、瀧村依里 (首席)
ヴィオラ：鈴木康浩 (ソロ・ヴィオラ)、柳瀬省太 (ソロ・ヴィオラ)
チェロ：高木慶太 (首席代行)



長原幸太

ロジェストヴェンスキーが十八番の傑作バレエを指揮

9/24 (土) 14:00 第191回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

9/25 (日) 14:00 第191回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

《チャイコフスキー／三大バレエ名曲選》
チャイコフスキー：〈白鳥の湖〉、〈眠りの森の美女〉、
〈くるみ割り人形〉から

指揮：ゲンナジー・ロジェストヴェンスキー (名誉指揮者)



ゲンナジー・
ロジェストヴェンスキー

ロシアの重鎮がショスタコーヴィチ作品で渾身のタクト！

9/26 (月) 19:00 第562回 定期演奏会
サントリーホール

ショスタコーヴィチ：バレエ組曲〈黄金時代〉、ピアノ協奏曲 第1番、
交響曲 第10番

指揮：ゲンナジー・ロジェストヴェンスキー (名誉指揮者)

ピアノ：ヴィクトリア・ポストニコワ



ゲンナジー・
ロジェストヴェンスキー

9月 公演の聴きどころ

16日の《名曲シリーズ》は、スペインのベテラン指揮者ロペス＝コボスが初登場し、得意のお国もので手腕を発揮する。今年83歳を迎えるスペイン最高峰のピアニスト、ホアキン・アチュカロを独奏に迎えるファリャの交響的印象〈スペインの庭の夜〉は、初演100周年を祝う選曲だ。これまでにクラウディオ・アバド、サイモン・ラトルら数多くの名指揮者と共演してきた老匠が奏でる至高の音色を堪能したい。このほか、アルベニスの〈イベリア〉など、スペイン情緒あふれる名曲が揃う。

20日は501席の親密な空間で室内楽を堪能できることで人気の《読響アンサンブル・シリーズ》公演。読響コンサートマスターで、ソリストや室内楽奏者としても活躍する長原幸太が、読響トップ陣とともにベートーヴェン交響曲第7番の弦楽五重奏版などを披露する。フル・オーケストラさながらの熱気あふれる快演に期待したい。

9月下旬には、ロシアの巨匠で読響名誉指揮者のロジェストヴェンスキーが、約4年ぶりに来演する。24、25日の《マチネーシリーズ》では、チャイコフスキーのバレエ音楽〈白鳥の湖〉から“4羽の白鳥の踊り”“ハンガリーの踊り”ほか、〈眠りの森の美女〉から“ワルツ”“パノラマ”ほか、〈くるみ割り人形〉から第2幕と、名場面を抜粋してお届けする。名門ボリショイ劇場で長年腕を振るったマエストロが、華麗な舞台を彷彿とさせる表情づけで夢の世界へと誘う。

26日の《定期演奏会》は、ロジェストヴェンスキー十八番のオール・ショスタコーヴィチ・プログラム。初期の傑作であるピアノ協奏曲第1番では、巨匠のパートナーでもあるヴィクトリア・ポストニコワが共演する。若きショスタコーヴィチが作曲した、シニカルでユーモアあふれる作品を、ダイナミックに聴かせてくれるだろう。後半は重要作の交響曲第10番。時代背景を肌身で知る長老ならではの深い解釈を堪能したい。(文責：事務局)

読響チケットWEB

検索

華麗に響く〈幻想交響曲〉。多摩公演だけの特別プログラム！

10/2 (日) 15:00 第3回 パルテノン名曲シリーズ
パルテノン多摩大ホール

ベルリオーズ：序曲〈ローマの謝肉祭〉

ビゼー：〈アルルの女〉第2組曲

ベルリオーズ：幻想交響曲

指揮：シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）



©読響
シルヴァン・カンブルラン

カンブルランが振る〈グレイト〉。ドイツの鬼才が共演！

10/8 (土) 14:00 第192回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

10/9 (日) 14:00 第192回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

10/10 (月) 祝 14:00 第91回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

ラモー：〈カストールとポリュックス〉組曲

モーツァルト：ピアノ協奏曲 第15番

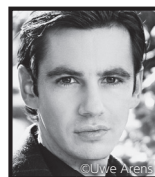
シューベルト：交響曲 第8番〈グレイト〉

指揮：シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）

ピアノ：マルティン・シュタットフェルト



©読響
シルヴァン・カンブルラン



©Live Arcana
マルティン・シュタットフェルト

気品に満ちた美の世界！ 名匠が指揮する《珠玉の名曲選》

10/14 (金) 19:00 第597回 名曲シリーズ
サントリーホール

シューベルト：劇音楽〈ロザムンデ〉序曲 ベルリオーズ：夏の夜

シューベルト：劇音楽〈ロザムンデ〉から“間奏曲 第3番”、“バレエ音楽 第2番”

ベートーヴェン：交響曲 第8番

指揮：シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）

メゾ・ソプラノ：カレン・カーギル

※一部曲目が当初予定より変更されました。



©K. K. Dundas
カレン・カーギル

世界的ヴァイオリニスト Midori が二つの協奏曲を一挙披露

10/19 (水) 19:00 第563回 定期演奏会
サントリーホール

完売

シューベルト（ウェーバー編）：6つのドイツ舞曲

コルンゴルト：ヴァイオリン協奏曲

J. M. シュタウト：ヴァイオリン協奏曲〈オスカー〉（日本初演）

デュティユー：交響曲第2番〈ル・ドゥーブル〉

指揮：シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）

ヴァイオリン：五嶋みどり



©T. Sanders
五嶋みどり

“カリスマ”上岡敏之と読響メンバーが繰り広げる白熱の室内楽

11/9 (水) 19:30 第12回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール ※19:00から解説

《上岡敏之と読響メンバーの室内楽》

シューベルト：ピアノ五重奏曲〈ます〉

ショスタコーヴィチ：ピアノ五重奏曲

ピアノ：上岡敏之

〔シューベルト〕

ヴァイオリン：太田博子

ヴィオラ：三浦克之

チェロ：芝村 崇

コントラバス：小金丸章斗

〔ショスタコーヴィチ〕

ヴァイオリン：赤池瑞枝

山田友子（首席代行）

ヴィオラ：長岡晶子

チェロ：松葉春樹



太田博子



三浦克之



芝村 崇



小金丸章斗



赤池瑞枝



山田友子



長岡晶子



松葉春樹

小林研一郎による《入魂のブラームス》。巨匠デームスが登場！

11/24 (木) 19:00 第564回 定期演奏会
サントリーホール

ベートーヴェン：ピアノ協奏曲 第3番

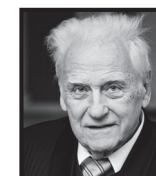
ブラームス：交響曲 第4番

指揮：小林研一郎（特別客演指揮者）

ピアノ：イェルク・デームス



小林研一郎



イェルク・デームス

“炎のコバケン”が得意のチャイコフスキー作品で渾身のタクト！

12/2 (金) 19:00 第598回 名曲シリーズ
サントリーホール

12/3 (土) 15:00 第4回 パルテノン名曲シリーズ
パルテノン多摩大ホール

チャイコフスキー：ピアノ協奏曲 第1番

チャイコフスキー：交響曲 第4番

指揮：小林研一郎（特別客演指揮者）

ピアノ：松田華音



松田華音

東京二期会オペラ劇場

■ 9/10 (土)、11 (日)、17 (土)、18 (日) 各日 14:00 開演

東京文化会館大ホール

指揮：ヘスス・ロペス＝コボス 演出：ヴィリー・デッカー

出演：ブライアン・レジスター、横山恵子、清水那由太、加納悦子、

大沼徹 ほか (10日、18日)

福井敬、池田香織、小鉄和広、山下牧子、友清崇 ほか (11日、17日)

合唱：二期会合唱団

R. ワグナー／トリスタンとイゾルデ (全3幕／原語上演・日本語字幕付)

[料金] S ¥ 15,000 A ¥ 13,000 B ¥ 10,000 C ¥ 8,000

D ¥ 6,000 学生 ¥ 2,000

[お問い合わせ・詳細] 二期会チケットセンター 03-3796-1831

長野県佐久市公演

■ 10/22 (土) 15:00 佐久市コスモホール

富山県射水市小杉公演

■ 10/23 (日) 16:00 アイザック小杉文化ホール ラポール

指揮：藤岡幸夫 ヴァイオリン：木嶋真優

モーツァルト／歌劇〈フィガロの結婚〉序曲

メンデルスゾーン／ヴァイオリン協奏曲

ドヴォルザーク／交響曲 第9番〈新世界から〉

[料金] 一般(前売り) ¥2,500 高校生以下 ¥1,500 (10/22)

一般(前売り) ¥6,000 高校生以下 ¥2,000 (10/23)

[お問い合わせ] 佐久市教育委員会文化振興課 0267-62-2111(代) (10/22)

アイザック小杉文化ホール ラポール 0766-56-1515 (10/23)

世界のマエストロシリーズ Vol. 4

■ 10/29 (土) 15:00 東京芸術劇場コンサートホール

指揮：ミシェル・プラッソン

ドビュッシー／牧神の午後への前奏曲、海

ラヴェル／ボレロ ほか

[料金] S ¥6,500 A ¥5,500 B ¥4,500 C ¥3,500 D ¥2,500

[お問い合わせ] 東京芸術劇場ボックスオフィス 0570-010-296